

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと「風」

第二十八号（二〇〇八年九月）

「文化力」を考える

白井啓治

「雷の吼えて 稲妻の走って

ゲリラ雨は何処に降る」

家がビリビリと振動するほど壮大に雷が吼えて、あつい黒雲を裂くように稲妻が走る。しかし、一粒の雨も落ちてこない日が何日か続いた。雨が降るものだと決めてかかって、庭木や鉢に水やりをするのをやめて待っていたら、結局降らないで終ってしまふ。

朝起きたら、鉢の植物はぐったりと葉を垂れてしまっていた。あわてて水やりをする。それで今度は、今にも雨が落ちてきそうなのに、せつせと如雨露に水を汲み庭木や鉢に撒いてやった。

ところが水やりを終えた途端、狂ったような雨が落ちてきた。夕方、家人が帰ってきて、雷ばかりで雨が降らないから、グリーン芝がめっちゃくちゃだ、とこぼす。

日本全国、予測のつかないゲリラ豪雨に泣かされた今年の夏であった。

雷と稲光だけで蒸し返している夕刻ではあるが、トンテケ、トンテケ祭囃子の稽古が始まる。夏も終わりである。9月に入ると、一層に大きくトンテケが響きわたる。しかし、その音は毎年覇気のない侘しいものに変わっていくようである。

この数年、この時期になると同じような内容の

原稿を書いている。

「石岡といえば、祭りだべ」

石岡の人は皆そう思っている。しかし、実際の祭りの内容は、年々寂れてきている。寂れてきていることを気付いている人もいるが、その理由を聞いていると、一様に景気の悪いことを挙げている。景気が悪いから寄付も集まらない、だから昔みたいには出来ない、と。おまけに徒党を組んで威圧的に寄付を強請に来る。末期的な状態である。

しかし、石岡の祭りが年々活気を失い寂れてきているのは、景気の所為では決まれないといえる。勿論、バブルが弾けて以来、経済の活性も低迷していることの影響は少なくない。だが、一番の理由は文化力の低下である。本当は、こういう時代であるからこそ、お祭りを大事に考え文化として確立し、経済の活性へも寄与させることが重要なのであるが、どうも思考が逆行している。

文化を伝統として繋いで行くためには、常に検証と見直しを図らなければならない。検証と見直しを忘れてしまうと、伝統としての価値や文化としての価値は、たちどころになくなってしまふのである。

最近、ようやく文化力ということがいわれ始めているが、文化力というのはこの「検証と見直し」がその基本力であるといえる。一つの活動の継続が伝統となって伝承され文化となるためには、た

だ続けていてもならない。検証と見直しという文化力をそこに与えなければ伝統文化、伝承文化にはならない。

これも毎年書くのであるが、私自身は、お祭りを否定しているわけではない。伝統化、歴史文化化することを願う話なのであるが、なかなか理解が届かないというか、理解をしようとする気持ちがないのか、そのことを真剣に討議してみようとする気配も現れない。少し残念に思う気持ちもあるが、このまま尻すぼみしていくことも浮世の実相なのだからそれに抗う気持ちはない。ただ私としては、作家としてその末席にはあるが座っている間は、文化としての言うべきことははっきりと言わなければならない。

以前にも文化の伝承ということで何度かこの会報にも書いてきたが、一つの行事なりが伝統的に継承されて一つの文化として成立していくためには、始まりの歴史の検証と現状の見直しが必要である。

「時の移ろいに洗われて継るは伝承」と文化のことを言い表すのであるが、この時の移ろいに洗われる、とはまさに始まりの検証と現状の見直しである。この洗濯によって綺麗になったものだけが、文化として暮らしを紡ぐ力を発揮してくれるようになるのである。

石岡の祭りのことを百年前の「よさこいそうらん」だ、と話す時、眼を皿のようにして驚かれる人がいる。かと思えば、石岡の祭りは石岡の五穀豊穡、民衆の幸せを願う神事で昔から伝わっている祭りだ、と口角泡を飛ばして語る人もいる。ちよつと意地悪に、総社が何で民衆の暮らしを祈願するんだ？総社とはそういう神社ではないだろう、

という黙り込んで、ごい形相で睨まれてしまった。

残念ながらこれでは、石岡が自慢したい祭りは早々に過去の遺物となるだろう。勿論文化にはならない。文化にならないから、暮らしの経済を呼ぶ力にもならない。勿体ないことである。

検証を捨ててなんでも曖昧なままにして過ごすのは、もしかしたら石岡の特徴なのかもしれない。石岡という市名の由来も定かではないし、それを一生懸命に検証し、石岡に暮らしの愛情を作り上げようという気持ちも薄いようである。石岡という名称は明治二年に始まったのであるが、何故石岡になったのかの理由は定かには解らない。だから石岡の名の生れた以後に生まれたお祭りであったとしても、始まりの検証が残されてなく、また検証をしようという考えもないのだから、このところ年々寂れてきていても仕方ないことである。

百年にして文化的力の失ってきたものに、カレンダーに付けられた六耀がある。明治に、どうしたらカレンダーを売ることができるとか頭を痛めた印刷屋が、日付の下に六耀を付す事を思いつき、それを付したところ、爆発的なヒットとなり、今もなおそれが続いている。そのうえ、本来の六耀の意味ではない、例えば漢字から勝手な印象を持ち、友引を友を引くなどと解釈し、祝い事はいけれど不幸の行事はその日にはやってはいけない、等と変ねりんな文化をつくってしまった。しかし、このバカげた文化も今ようやく若い人たちから無くなってきた。

六耀というものの検証をしていけば、こんな一人歩きの似非文化はできなくても済んだのだが、

百年の経つてようやく似非が擦り減ってきたようである。

私は、石岡のお祭りもそうであると思っている。寂れていく原因は、検証と見直しがないからである。時の移ろうの中に、間断ない検証と見直しがあれば、暮らしのための文化として、経済活動を伴って残っていくであろうが、今のままでは何れ遠からず廃れていくであろう。近代になって初めての「よさこいそうらん」の創造であった石岡の祭りも、創造した先人には申し訳ないが、残念なことになりそうである。

こんな話を聞いた。石岡囃子が、だんだん特徴がなくなり、土浦などのお囃子に似てきた、と。しかし、それは間違った見方であろうと思う。もともと石岡囃子というものがあつたわけではないので、八郷や三村、土浦などのお囃子を参考に真似て作られたものであるから、お囃子としての芸術的完成度がなく、それを更に完成させようという後人の努力がなかったため、個性の色濃く残る地域の完成度の高いお囃子に原種帰りをしているのだろう。

その地の風土の中で時の移ろいに洗われて残った芸能文化というのは、非常に力強く未来を導いてくれるものである。

文化が国を救う。文化力こそが、今私たちの学び、身につけなければならぬことであろう。少し前だと、こんな話は、作家や表現者仲間ではできなかったのであるが、新聞などに社会問題として取り上げられるようになったことは、ヨーロッパには相当遅れをとっているが、歓迎すべきことである。

「ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会

をお待ちしております。会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会。

入会に関するお問い合わせは、下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063

兼平 ちえこ 0299-26-7178

打田 昇三 0299-22-4400

伊東 弓子 0299-26-1659

歴史ガイドに同行して(5) 兼平ちえ

四月十二日に行なわれた「常陸国風土記を歩く会」の皆さんへのご案内コースを、会報二十四号より四ヶ月に亘ってご紹介してきましたが、今回からは、五月十日にご案内した旧石岡市内の神社を中心としたコースをご紹介します。

①石岡駅

②鈴の宮稻荷神社

③華園寺

④常光院

夏の終わりにもう一度ウオーキングを兼ねて尋ねてきました。

①石岡駅

明治二十八年(一八九五)に開設。すでに一世紀。百年余りの歴史を刻み込んでいます。沢山の出会い、別れ、思い出を乗せて、今日もありがとう。これからも元気で走ってください。礼!

駅改札口の上部には、ジャーナリスト・著作家であります徳富蘇峰(小説家徳富蘆花の兄)書の扁額「石岡驛」が掲げられている。律儀で清楚な書体に惹き付けられました。

下りホームに出ますと、伝説・常陸国分寺の雄鐘と雌鐘の壁画が歴史を語ってくれます。

②鈴の宮稻荷神社

石岡駅を背に、リニューアルされ広々とした駅前通り(御幸通り)より左に目を移します。元西友ビルの前を入り、なだらかな上り坂のカーブを過ぎ丁字路へ。右側に折れると金丸通りになります。石岡プラザホテルを左側に見ながら、間もなく広場を横にして鎮座しています。古い歴史を持

つ神社ですが、現在の建物は平成三年に建て替えられたそうです。

祭神は宇迦魂命(うかのみたまのみこと…食物、殊に稲作をつかさどる神)。御神木は、戦前までは桜の木だったそうですが、現在は樹齢三〇〇年を誇る銀杏の木が大役を果たしているそうです。

天平年間に創祀といわれ、大掾国香(平安時代から戦国時代まで常陸国に勢力を誇った豪族の始祖)の守護神として尊崇されている。

鈴の宮稻荷神社については諸説の中「石岡の地名」より抜粋してみました。

|| 金丸町にある鈴の宮は現在稲荷神を祀り、土地の人々に尊信されているが、稲荷神を祀ったのは江戸中期以降のことで、それ以前の文書はただ鈴の宮と記している。駅制では、官人は往来する時、駅使が鈴を鳴らして通行した。駅制が廃絶したあ、駅鈴を神社に奉納し、その神社を鈴の宮といった。

常陸国(六四六年、現在の茨城のほとんどが常陸国として誕生)国府が置かれた時代に、官人の交通のため駅馬や駅鈴が置かれた駅舎があった地と言われている。

幕末元治元年(一八八四)、尊王攘夷の旗印に天狗党六〇余名が勢ぞろいして挙兵の為、筑波山へ出発した由緒ある地でもあります。当時この辺りは新地八軒と称し、府中宿の遊郭があったと言われている。

③華園寺

明治二十八年、常磐線開通により石岡駅からの道がつながると、銀行、新聞社、劇場などもでき金丸通りは石岡駅前通りとして大いに賑わいました。(打田昇三作・石岡物語より)

かつての繁栄を感じながら、金丸通りを西へ向かう。間もなく点滅信号の交差点を左へ曲がると金丸寿通りとなります。(右は現在の駅前通りこと御幸通り)映画のロケ現場にも選ばれる昭和の良き時代を感じさせる、ほっとする町並み。

この寿通り前方突き当たりには、石岡の民の幸せを一心に祈り、見守る北向き観音が優しく鎮座している。昔懐かしい菓子、あん玉のあるお店を覗きながら、間もなく左側に華園寺。宗派は時宗。本尊、阿弥陀如来。現在の本院は、文禄年間に時宗を尊崇した佐竹氏の建立と云われている。

境内には地藏菩薩が三間四方の堂に安置され、安産の御利益があると信仰されている。享保十三年(一七二八)、昭和四年にそれぞれ全焼しており、記録を残すことが少なく不詳の点が多い。

④常光院

更に北向き観音に向かって進む。おにぎりやさんのある交差点を越えると左側、奥まったところにあります。五一センチメートルの阿弥陀如来像を本尊とする。宗派は天台宗。本寺は数度にわたる火災等で、縁起等の文書、宝物は焼失。現在の本堂は昭和四十年に鉄筋コンクリートで建立されたものである。

墓地内には、鎌倉、室町時代の五輪塔、延命地藏像の石仏が多い。尚、「農具万能」で知られる鈴木万能の墓もある。旧玉造町の農家育ちの私にとつては、身近で便利な農具の発明者が石岡であったとは驚きと感激ひとしおでした。

農具万能は専売特許でもなく、実用新案でもないので鍛冶屋さんたちは誰でも作り、販売したという。その為に万能が普及された原因になったそうですが、そのおらかな心に鈴木万能の偉大さ

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」第10回定期公演

「悪路狼夢(オロロム)の歌」

10月19日(日曜日:午後2時開演)

私が死んだら、この御魂を天の神《シカシマ・カムイ》のおわす森に帰してくれ!!

ことば座第10回定期公演は、常世の国の恋物語百/第16話として「悪路狼夢の歌」をお届けいたします。

悪路王と恐れられた悪路狼夢(オロロム)は、信頼すべき敵将・坂上田村麻呂に言い残して河内国杜山で斬殺処刑された。田村麻呂は、悪路狼夢の首を密かに桂村高久の鹿島神社に安置し、時を図って鹿島神宮に祀ることを考えた。しかし、悪路狼夢の首は坂上田村麻呂の手で鹿島神宮に祀られることはなかった。しかし、悪路狼夢の御霊は八百年後、子孫の手で首彫として鹿島神宮に奉納された。

小林幸枝が、矢野恵子の打つ古代リズムと琴の音にのって永遠の愛を舞う!

(講演料金) 前売券 2500円、当日券 3000円、小学生 1800円
前売券は、ギター文化館(0299-46-2457)および
いしおか補聴器(0299-24-3881)にて取り扱っております。

ことば座 〒315-0013 石岡市府中5-1-35

があった、ということに更に更に感激を深くしました。合掌。
この感激の余韻のままに今回は終了とさせていただきます。

参考資料 石岡市史(上)

・葉陰に頼りて 縄文の華 ちえこ

(風土記の丘にて)

やっと行ってきました

小林幸枝

もう何年も前から、今度こそ今度こそと言いながら実現できなかったことを、先日ようやく実現することができた。
このように言うと、なにか大変で重大なことのように思われるかもしれませんが、でも、その内容は大事なことではなく、話せば笑われてしまいそうな事です。

新撰組ゆかりの地、芹沢鴨の生家跡を見たい、というものでした。石岡に住んでいて、芹沢鴨の生家跡を見に行くことなんて、実に大変なことでも何でもありません。でも、とても大変なことのように、なかなか見に出かけることができなかったのです。

昨年、十月から、玉造にお住まいの、オカリナ奏者の野口さんと交流を頂くようになってから、頻繁に玉造に出かけ、毎回のようには355号線に架かっている「新撰組ゆかりの地」を案内する看板を見て、次に来たとき、次に来たときと思いつながら、なかなか行けなかったのです。

ある時、脚本の白井さんと野口さん宅に伺った帰り、脇道に入ってしまったと思つて、寄り道しませんか、と見学に行つたのですが、何処だか分からなくなつて帰つてきてしまいました。家に帰つて地図を見たら、諦めて引き返してきた少し先だった。なんとも間抜けなこと、見学が実現できなかったのです。

八月の末のことでした。地域の情報誌に芹沢鴨ゆかりの地の記事が出ていて、案内がされていきました。この機を逃したらまたしばらくチャンスが失つてしまうだろうと思つて、早速出かけてみることにしたのでした。

現地に行き、立て看板に書かれた回遊マップに従つて、

- ①手奪(てうばい) 橋の言われ「河童の恩返し」
- ②芹沢鴨生家跡
- ③芹沢城跡
- ④平間重助
- ⑤芹沢家の墓

の順に回ってみました。一回りして四十分余り

のコースですが、なかなか良いウォーキングコースに思いました。

河童の伝説は、日本の各地にあります。河童の恩返しとして芹沢の殿様に傷薬の処方箋を伝授したというのは、筑波のガマの油にダブって、大変面白く思いました。

この話を、白井さんに話して、薬売りの口上を考えてもらい、筑波山でガマの油売りのボランティアをされている細谷さんに、橋のたもとでパフォーマンスをやってもらったら面白いだろうなと思つて帰ってきました。

家に帰つてふと思つたのは、石岡は歴史の里とは言いながら、史跡の説明看板などが何と少ない所なのだろうかということでした。歴史の里なのに観光客もほとんど来ない。これは、散策に来られた人たちが、成程、と思える、小さくてもいいからおもてなしの心を示す工夫をしてないからなのだろうな、と思い、寂しくなつた。

定説の崩壊

菅原茂美

『定説』とは、長年かけて検証され、絶対的に確実なものとして、広く世に認められた説を云うのである。

事実、ノーベル賞委員会は、かつて寄生虫の寄生が発癌原因とした新説に授賞し、後に否定された苦い経験から、今日では、発表から、かなりの年月を経て、広く定着した学説でなければ、授賞しない傾向が見られる。

また新説の発表は、守旧的社会からは、大きな

抵抗を受ける。ガリレオは、コペルニクスの地動説を是認したため、宗教裁判で厳しく弾圧された（1992年バチカンのローマ法王は、360年ぶりにガリレオに謝罪）。同じく、ダーウインは進化論で、人の祖先は猿だと述べたら、『猿は、あなたの父方の祖先ですか、それとも母方ですか？』と、なじられたという（同じく法王は96年、137年ぶりに謝罪）。

さて、長年定説とされていたはずの絶対的セオリーが、近年DNA解析の進歩や、放射性同位元素による地質年代の確定など、決め手となる科学技術の進歩により、次々と崩壊しつつある感がある。物によつては、教科書を書き換える必要があるかもしれない。

中には功名心に焦る学者が、十分な検討が終わらない中に先着発表をし、大きな反論を巻き起こす事例も見られる。我々技術屋は、定説とされる論拠をバックボーンとして、仕事をしている。科学の進歩と言えはそれまでだが、簡単に定説がコロコロ変わつては、一体何を信じて良いのかと、戸惑うこともある。

そこで今回は、最近、定説が崩壊しつつあると報じられた数例を紹介し、今後の成り行きを見守つていきたい。

(1) 太陽系第10惑星の発見

わが太陽系の惑星は、水金地火木土天海冥の九つと教科書に載っている。

【最後の冥王星は、1930年、アメリカのトロンボーによつて発見された。太陽から最も遠く、1個の衛星を持つが、質量は地球の500分の1しかない。しかし冥王星は、2006年の国際天

文学会において、太陽系外縁部（カイパーベルト）に、より大きな小惑星が数個存在することなどから、惑星の「定義」が見直され、翌07年の総会で、惑星の登録名簿から削除され、「矮惑星」と呼ばれることになった。】

そもそも、惑星の定義そのものが「恒星の周囲を公転する星」と言う以外、明確な基準はなかった。冥王星そのものが、質量が非常に小さく、雪玉のような氷と岩石の塊なので、惑星と呼ぶには相応しくないと云う学者が多かった。それなのに、NASAは先着発表を急ぐ余り、詳細データは後にして、冥王星以遠の単なる氷の塊（2003UB313）を、05年7月末、第10惑星として登録した。これは地球の衛星月より遙かに小さく（直径2600km）、公転周期557年、太陽からの距離は地球の97倍という事である。実際この程度の天体は、カイパーベルトに10個ほどあることは、すでに分かっていたことである。ウェブサイトへの情報漏れが危ぶまれ、前倒し発表という事らしいが、学者の先陣争いの感は拭えない。従つて惑星リストから、第九（冥王星）は消えたと、第一〇は幻の星となった。（現在、中国で普通のリングに、「青森」という商標登録がしてあり、日本の青森県産のリングを、青森と言う名で販売はできないと云う。科学者の惑星発見などという偉大な業績も、こんな低レベルの話と同じかと思うと、情けなくなつてしまふ。）

(2) ジャンクDNAの役割

人間の体は約60兆個の細胞からなる。その総ての細胞に二三対の染色体があり、各染色体には、約30億個のDNAの塩基配列がある。その塩基

配列が、その生物の総ての遺伝情報(ゲノム)を担っており、タンパク質を作る遺伝子の部分と、作らない部分とが混在している。

二〇〇三年は、ワトソンとクリックがDNAの二重螺旋構造を解明して50年目という事で、世界中の関係機関が協力してヒトゲノムの全塩基配列を解読した。その結果、これまでヒトの遺伝子の数は、およそ10万個とされていたが、実際は何とその四分の一ほどの二四、〇〇〇個ぐらいのことである。

さて問題はその先の話である。これまでの定説は、ゲノムの中で機能のあるのは遺伝子だけで、その他の遺伝子を作らない配列のDNAは、全く役に立たない「ガラクタ」であり、ジャンクDNAと呼ばれてきた。

ところが05年、そのジャンクDNAの大部分は、読みとられたRNAにより、発生や、種の特異的な形質をコントロールし、細胞の周期や生死にまで関与するなど、重要な役割を担っている事が明確になったと報道されている。

遺伝子そのものの定義があやふやになり、またジャンクDNAから写し取られたRNAによって、遺伝子が活性や抑制されるとあっては、今までの「遺伝子がタンパク質を作り、タンパク質が生体を作る」というセントラルドグマ(中心定理)は一体どうなったのかと戸惑うばかりである。そして今、科学者達は、ガラクタと思われるいたジャンクDNAが、多大の機能を担っており、更に新薬開発など宝の山の可能性が出てきたので、大いに目を輝かせているという。

(3) 遺伝子の退化がヒトの進化を生んだ

遺伝子の退化が、ヒトを進化させた、などと云われたら、何を寝惚けた事云ってんだ、と文句の一つも云いたくなる。

これまでの我々の常識は、進化とは、新たな機能を獲得し、生存に有利な体型へと変化し、今まで無かった遺伝子が新たに増えた事であり、ヒトのように複雑に進化した動物は、下等な動物に比べたら、遺伝子はかなり多いに違いない：：と、長年信じられてきた。

ところが、体長1mmで、体の全細胞数が、たった1,000個ほどの「線虫」の遺伝子数は、ヒトの約2分の1もあり、更に、ヒトとマウスのゲノムにある全遺伝子の九九%は、相同だと云う。又、他の霊長類には無くて、ヒトにだけ存在する遺伝子は、殆どないと云う。

さて、ヒトはマウスやサルと遺伝子の機能はあまり変わらないとするなら、一体何をもって、人間を人間たらしめているのか？ どこが変化して、ヒトが人らしくなったのか？

極めて新しい学説によると、それはゲノムの中の遺伝子が機能を失う事により、その種の進化をもたらすという、逆説的な考えが持ち上がってきたと云うのだ。

ヒトは、150もの退化器官が有るといふ。尾骨、犬歯、盲腸、副乳、体毛などの他、特殊細胞、ホルモン、酵素等々。(遺伝子は消失ではなく退化した場合、体毛、副乳など機能回復して、時々先祖帰りが見られる)。

またヒトでは、ビタミンCを合成する酵素の遺伝子が、退化(果物が豊富な熱帯で進化)したため、ビタミンCが欠乏すると「壊血病」となるが、マウス、ウサギ、イヌなどは、体内でビタミンC

を合成できるので、壊血病にはならない。また、微生物との共生の関係で、合成酵素が不要となり、遺伝子が退化した例もある。

更に、この辺が極めつけのようだが、人類は、石器や道具、火の使用により、食べ物に変化が起こり、頭部まで伸びていた咬筋が退化した。そのため、頭頂部の骨により、大脳が押さえつけられなくなったため、フリーとなり、大脳容積が一気に増加した(化石年代とも一致する)。それが、ヒトを人たらしめたとも云われる。

さてヒトは、野生の動物にくらべると、五官は退化著しく極めて鈍い。視力(ノスリはヒトの8倍)、聴力(コウモリは超音波を感知、像は地震の超低周波を感知、先のインド洋津波では遭難を免れた)、嗅覚(イヌはヒトの10万倍)、味覚(ヒトは毒茸を舌で弁別できない)、触覚(ヒトは地面・空気・水などのかすかな揺れには、極めて鈍感など)、生き物として必要不可欠の感覚器官が、かなり退化してしまった。

更に地磁気、電磁波、放射線など全く感知できず、魚の回帰、鳥の渡り、動物の平衡感覚、保護色、婚姻色、擬態など、更に昆虫のフェロモンなど、到底ヒトは、その足元にも及ばない。

【このように、ヒトという動物が何百万年もかけて進化してきた、生存のための諸機能を、わずかにばかり大脳が発達した見返りに、何もかも失いかける、或いは捨て去る事は、人類にとって、本当に幸せであるかどうかは分からない。

野生を捨て、代わりに、より高次の倫理規範・法律などで、社会のルール・掟などが、到底守られるものでない事は、現在、世界共通の利己的な人類行動を見れば、よく分かる。

集団で暮らす動物の方が、遙かに慈悲に満ち、助け合って生きている。それに比べたら人類は、完全に弱肉強食型で、残虐性著しいことは、世界の歴史を振り返れば、すぐ分かる】

さてヒトは、ネオテニー「幼形成熟」と言っており、子供の姿のまま性的には成熟して繁殖能力を持ち、生殖器官だけが他と比べて、早く成熟（異時性）するため、幾つかの発育段階が省略される。すると、その省略された発育段階で使われるべき遺伝子が無用になり、退化していくと云われる。（日経サイエンス「崩れるゲノムの常識」）。このように遺伝子は、内的（ゲノム）、外的（例えば夜行性になれば、色覚が退化し、嗅覚・聴覚が代的に発達）要件により、活発化したり、退化したりすると云う。

そもそも進化⇨進歩⇨繁栄、と考えるから混乱が起きますので、むしろ進化⇨変化ぐらいに考えた方がよさそう。そしてネアンデルタール人が3万年前に滅亡したように、いわば種の寿命のようなものがあり、現世人類は、人口過剰や、歪な大脳容積の膨張などが障害（殺人や戦争を抑制できない）となり、まもなく、滅亡への坂道を一直線に下っていくのかも知れない。

(4) 心筋幹細胞による心機能回復

これまで人の大脳神経細胞や、心筋細胞は、病気などで損傷を受けると、回復不能というのが定説であった。

肝臓や皮膚の細胞などは、ひどい損傷を受けてもかなり回復するが、神経細胞や心筋細胞は決して回復は不可能で、再生など思いも寄らないことであった。

ところが、京大グループは、損傷した人の心臓組織の一部を切り取り、特殊な酵素で細胞をバラバラにし、培養したところ、約8000個に1個の割合で、塊にまで増殖する細胞を見つけた。更に、この塊を培養し続けたところ、なんと心筋や血管等の組織にまで成長したと云うのである。そしてこの塊の元となった細胞こそ、「幹細胞」と云われるもので、同様の方法で、マウス、イヌ、ブタなどでそれぞれ心筋梗塞を起こした心筋に、この幹細胞を移植したところ、いずれも心筋や血管の組織に成長し、心機能が回復したと報じられた。

日進月歩の医学の進歩には、難病に苦しむ人のことを考えれば、心から拍手を送りたいが、受精卵からの幹細胞である「ES細胞」による再生医療については、生命の尊厳を冒す恐れなどから、現在多くの議論がある。しかし、体組織からの体性幹細胞が、このような機能回復に使えるとなれば、神経細胞が失われたパーキンソン病や、膵臓細胞が傷ついた糖尿病等の難病治療にも適用できるのではと、期待が大きい。

(5) ホモ・フロレシエンシス（史上最小の原人）の発見

今から略3万年前、ネアンデルタール人が、この世から姿を消して以来、地球上の全人類は、我々ホモ・サピエンス1種類のみと言われてきた。ところがネアンデルタール人滅亡後も、もう1種類の原人が、インドネシアのフローレス島（バリ島の東）に、今から13,000年前まで生存していたと、04年10月ネイチャー誌に掲載された。これは、全くの寝耳に水で、世界の科学者達に衝撃波が走った。

史上最小の原人、その名はホモ・フロレシエンシス。体高1.1mそこそこ、現世人類の3歳児並。400万年前のアウストラロピテクス（150万年前に滅亡）の最小のものとほぼ同じ。

現世人類との明確な骨格の違いは、①オトガイがない、②突出した眉丘、③低い頭蓋、④顔面がやや出っ張っている等。脳容積はチンパンジーぐらい。それなのに石器は石錐（いしきり）、石刃、尖頭器（槍先）など、かなり高度。同時出土した、炭化獣骨から、火も使用していた。

これに対し、早速反論が出た。①現世人類の子供の骨ではないか？ 否：歯の摩耗から大人である。②現世人類の小頭症ではないか？ 否：先の4項目は歴然とした違い。それに、小頭症は、頭は小さくとも体骨格は普通。フロレシエンシスは、全てミニサイズ。

ではホモ・フロレシエンシスはどこから来たのか？ さまざまな推論はあるが、最も有力なのは次のとおりと言われる。

「**鳥嶋（とつじょ）化現象**」：食糧の限られた小さな島では、猛獣がいなければ、環境に適応するため、ウサギより大きな動物は小型化し、ウサギより小さな動物は大型化する。これを、『鳥嶋化現象』という。アジア象は体高2,452,9cm。体重は4550kg。フロレス島に渡ってきたアジア象は、小型化し、ピグミー・ステゴドンとなり体高1,2m、体重500kgとなった（フロレシエンシスはステゴドンを狩り、食糧にしていた）。また、ウサギ大に巨大化したクマネズミは、同じく貴重な食糧になった。

結局、ホモ・フロレシエンシスは、現世人類と同じ大きさのジャワ原人が、島伝いにフローレス

島にやって来て定住し、島嶼化現象により、小型化したと言うのが、現在のところ有力な結論のようである。

教科書は定説重視のため、時代にマッチしなくなる事がある。日進月歩の科学の進歩に、遅れまいとする努力は、ただ事ではない。

元気なサツマイモ：

伊東弓子

二年前に韓国に住む娘の所へお産の手伝いに行った時のことであつた。私の心に深い思いを残した出来事があつた。荒地のような小さな土地で、懸命に畑づくりをしている人に出会つたのだつた。早朝の散歩は、その日の大きな原動力を与えてくれる。娘達は、現代風の高層アパートに暮らしている。その地域は、高層アパートを中心に新しく住み始めた人達と、昔からの農業で暮らす人達とが混然としている所である。

私は、一日の大半を現代的なアパートの中で過ごしている事が多いせいか、散歩に出るとどうしても足が農村地区のほうに向いてしまう。

家々からは朝の賑やかな声が聞こえてくる。曲がりくねつた道を田畑に急ぐ人の姿も見える。夜露をためた畑の野菜や果物は、生き生きとした笑顔を見せている。これらのことは朝にしか見られない、どこの国にもある命の音ではないかと思う。

その日はアパートの前の大通りから細い坂を下りた。草を踏む感触がいい。靴が濡れてくることでも歩いているという強い感じが伝わってくる。男の人が屈んで畑仕事をしている姿が見えた。

鉄片の破片で土を掘り小高い畝を作つていた。土は乾ききつて大小の石が混じつていて、掘り起こされた大きめの石が畑の隅に高く積まれている。

「おはようございます」

つい日本語で挨拶を言つてしまった。男は振り向く気配すら見せない。黙々と自分の行うべき動作を繰り返している。これで力が入るのかと思われるほど細い手足である。立ち上がつて移動する時、男の全身が見えた。痩せて背の高い男だつた。顔色が黒ずんで、こけた頬を見るに、健康は大丈夫なのだろうかと心配になつた。

完成した一本の畝に植え始めたのはサツマイモの苗だつた。あまり眺めていても思つたが、気になつてその場を立ち去ることができなかった。草花を摘むふりをして男を見ていた。

いもの苗はどれも貧弱だつた。小さな芽は、黄ばんだ緑色になつていた。男は、細い指で苗を土に押し込み、根元を両手で固めている。畑はあまり広くはないが、この人の仕事の量としてはかなり多く、相当の時間がかかりそうであつた。草取りなどの下仕事にも随分時間のかかつたことである。

ギター文化館

2008 CONCERT SERIES

The 15th anniversary

10月18日 宮下 祥子 ギターリサイタル

10月26日 長谷川きよし コンサート

12月 7日 マリア・エステル・グスマン
ギターリサイタル

12月14日 ロス・トレス・アミーゴス

フォルクローレコンサート

ギター文化館も開設して今年で15年になります。

魅力タップリの大型企画で皆様のご来場をお待ち

いたしております。

ギター文化館

〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

0299 - 46 - 2457

FAX0299 - 46 - 2628

しかし、何よりも地力のなさそうな苗が根付くのか、育つて実るのか、と心配である。

立ち去りがたくあれこれ思っている、周りの葉の色が変わっていくのを感じた。間もなく向こうの山の峰から陽が出るのだ。ようやくその場を立ち去るきっかけをつかんだ。何度か振り返って見たが、男は変わることなく屈みこんで作業を続けていた。

痩せすぎて黒ずんだ顔色から、ふと秋まで元気でいられるのだろうか、と思ってしまった。秋に自分の丹精したサツマイモを食べられるだろうか。他国に来て、何の様子も分からず勝手な想像をしても始まらないのだが、もしかしたら娘と限られた会話しかできない状況を恨んでの妄想なのかもしれないと言いつつ聞かせた。

男のことは娘にも話せず、散歩でもその畑を避けた。そのくせ畑仕事は全部終わったのだろうかとか心配する自分が可笑しかった。大丈夫、秋にはおいしいサツマイモを食べるに違いないと、自分に納得させた。

日本に帰ってから、孫との楽しい日々を家族に伝えながら、心の隅ではあの畑を耕していた痩せた男のことが気になっていた。

今年の夏に再びお産の手伝いで韓国に行くこととなった。成長した孫に会う喜びは勿論であったが、二年前に心に残したあの畑の人に会えるかもしれないという不思議な懐かしさを覚えた。

愛らしい盛りの孫は、言葉少ない中にも日本語で私を呼んでくれるようになっていた。この孫の手を引いて、涼しくなった夕方を待ちかねたかのように散歩に出た。会うことが叶わぬまでも、何かしらの情報が得られたらと期待と不安に胸が膨らんだ。

らんだ。

アパートの前の道路はなかなか渡れないほど、車の量が増えていた。やつとの思いで渡ると、木立が茂りほっとする風景の畑の道が現れた。はやる気持ちを抑え、孫の手をしっかりと握って道を下りた。

目の前に私の予想を裏切る畑の姿が現れた。サツマイモの葉が地面を覆い、蔓は太く逞しく、葉も青々としている。

「元気です！」
そう呼びかけてくれた。そこにはもう痩せて石ころだらけの畑はなかった。サツマイモの葉が艶やかな絨毯となって迎えてくれた。痩せて弱々しいと思っていた人も元気であるに違いない。そうでなかったらこんなに立派な畑になるはずもないのだから。

変わっていく農村の中で、弱気にみえた痩せ男が、百姓力で土を肥やし、立派なサツマイモを育てているのだ。思わず涙がこぼれ落ちた。

「ばあちゃん。ばあちゃん」

と呼ぶ声に振り向いて、

「ばあちゃん嬉しい。とつても嬉しい」

そう何度も声に出して、孫を思いきり抱きしめるのだった。

凶賊の末路

打田昇三

ロシアの首都モスクワから夜行列車でバルト海沿岸のサンクトペテルブルグまで移動したことがある。何処までも闇の中を走り続けて翌朝、目が

覚めたら「モスクワ駅」だと言われ一瞬、頭の中が真っ白になった。

ロシアでは終着駅に始発駅の名前をつけるのだと聞いて一安心したが、その時に体格の良いロシア人のガードマンが同行してくれた。勿論、旅行会社が雇った護衛で、旅行者の貴重品や荷物が狙われるからだという。

ソ連邦の解体でロシアが誕生しエリツイン君が頑張っていた時代だから「恐怖政治」のイメージは消え、クレムリンにも近寄れたが、経済的に不安定でコソ泥や強盗が多かったらしい。

最近の日本は、セコイ犯罪もさることながら、凶悪な事件が増えて「法治国家」の名称を返上しなければならぬ程である。犯罪のニュースを見る度に腹が立つのは、捕まった犯人が口を揃えて「殺意は無かった」「殺すつもりは無かった」などと「天の声」まで持ち出し、弁護士は「責任能力」が有るとか無いとか、被害者を忘れて屁理屈で被告を庇うことである。

「凶器で無防備の人間を襲えば死ぬ」こんな単純な原理は子供でも分かる。襲うからには犯人が持つ意識は殺意以外にないし、責任は結果に対して負うもので能力には関係ない。馬鹿馬鹿しい逃げ口上を言う奴には「殺意はありませんから…」と断って裁判官が犯人を同じ目にあわせる、そういう制度があっても良いのでは…

「仇討ち」は明治六年に禁止されたようだが、江戸時代でも八代将軍・吉宗の頃からは武士の間わる仇討ちが急激に減ってきたと言われる。その理由は知性の向上に加えて経済的な問題であったらしい。仇討ち期間中は「休職」で給料も貰えず、相手を探すのも容易ではない。

凶悪犯人は強引な弁護士や精神鑑定で助かる道が有り、それでは被害者の怨念が消え無い。遺族が怨みを晴らそうとしても仇討ちは出来ず時代劇の世界だと「必殺仕事人」が何とかしてくるのだが、現実にはそれも出来ない。そうなるも残された手段は「ふるさと風」前号の「汚された浄土」でも触れたが「因果応報」の摂理に頼り犯人を苦しめるしか手段がない。

仏教界の墮落を戒め改革を進めた嵯峨天皇は弘仁十四年(823)に皇位を淳和天皇に譲り隠居した。淳和天皇は常陸平氏の祖・葛原親王の兄弟で年齢が近い。淳和天皇は嵯峨上皇を立てながらも荒廃した地方政治の建て直しに努め文化的な事業を進めた。常陸国が「親王任国」に指定されたのはこの天皇の時代である。

奈良の薬師寺に景戒という僧が居た。弓削の道鏡が称徳天皇に取り入り権力を揮っていたことに反発して「浄土思想」を学び「因果応報」の物語を集めて「日本国現報善悪霊異記」を著した。それが完成したのが淳和天皇時代である。…と言っても、景戒のことを伝える記録は他に無く、然も、この物語が日の目を見たのは明治時代だそうで、題名のように気味は悪いが「悪人ども」には効きそうな内容が書いてある。

略して「霊異記」というこの本の話は、かの「源氏物語」と双壁を成す平安文学の「今昔物語集」にほとんどが採録され、さらに近代には芥川龍之介が名作に素材を求めている。

「今昔物語集」の成立は十二世紀前半と推定されておられ、選者には「鳥獣戯画」で知られた鳥羽僧正や、その父親の宇治大納言源隆国(醍醐源氏)が当てられているのだが、白河天皇説を主張する

国文学者もある。

白河天皇は、初めて然も長期に亘り院政を行った天皇であり、健康保険が「後期高齢者扱い」になるまで政治に睨みを利かせていて曾孫(実は実子の噂があった)崇徳天皇を強引に即位させた。それが原因で「保元の乱」が起こり、石岡ゆかりの桓武平氏が台頭し始める。

保元の乱で敗者となった崇徳上皇は讃岐に流され幽閉されていたが、怨念の固まりのように敵を恨んで過ごし、飢饉や洪水などの災害に効果？を顕し石岡の金比羅宮に祀られている。

白河天皇が今昔物語集の選者だとすると、曾孫に可愛い息子の晩年を予見し、怨念の予告で「報復もの」を編集したことになる。

源隆国も、「安和の変(冷泉天皇時代の皇位継承を巡る藤原氏の陰謀)」で、菅原道真公と同様に左大臣から九州へ左遷された源高明(村上天皇の異母兄)の孫である。藤原氏全盛時代に怪しい話を集めた意図が理解できなくもない。

石岡市史にも古代から残された多くの伝説が集められており、それらは神仏を敬ってその加護を得た説話であり、また悪行の報いでもあり、そして尽きぬ怨念の物語でもある。

その中で村上地区に伝わる「龍神山と茨城童子」という話の前半は、晡時臥(くれふし)山こと龍神山の水の恵みと龍伝説があるということだけでキャラメルのおマケのようなものだが、後半の「茨城童子」の話は、現存する大きな「きんちゃく石」多分、古寺の礎石？を巾着袋の根付にするほど巨大な鬼が、武将に征伐されることを恐れて逃げ出したという設定である。

どうも、この説話は「桃太郎」「猿蟹合戦」な

どと同様で、最初から「お子様向き」に適当に創られたように思われる。歴史の里・石岡の歴史的原点である龍神山の伝説であるから、嘘と分かっていても理路整然としていて欲しい。

幾ら武勇の誉れが高い源頼光が相手だとしても、大きな石の根付を腰に挿すほどの巨人が噂だけで逃げ出すというのは、凶悪犯人が殺意を否定するようなもので筋が通らない。

この伝説を大切に守ってこられた祖先には申し訳ないが、茨城童子は丹波の国の大江山に巣くっていた酒呑童子(しゅてんどうじ)の兄弟分だという戸籍謄本を頼りに、その正体をあばいてみようと思う。今さら遅いかも知れないが、

茨城童子に殺害された龍神山麓の善良な人々の怨念を晴らすためである。石岡の伝説では鬼越峠を越えた茨城童子は行方不明になっている。

「因果応報」の趣旨でこれを何処までも追い詰め村人の仇討ちをするつもりである。

平将門が常陸国府の町(古代の石岡)を焼き払った事件から十五年ほど後のこと、現在の京都駅付近にあった左馬頭(さまのかみ)運輸大臣のような官職)源満仲の屋敷で奥方(嵯峨源氏である近江守の娘)が一人の男児を生んだ。満仲の父親は清和天皇の孫に当たる(…ということになっている)源経基で、平将門事件に深く関わった人物である。六十余歳で初孫の顔を見たから大喜びで「文殊丸」と名付けた。この文殊丸が成人して清和源氏の嫡流を継ぎ源頼光という武勇の誉高い武士になる。

日本の中世を華々しく飾った「源氏と平家」は共に歴代天皇から臣籍に下った皇族の子孫であるが、その系統は数えられない程多い。そのうち、

一般に「源平」と言われているのは「清和源氏」と「桓武平氏」のことである。

古代以来、天皇が管轄していた「兵制」では事が起れば適任者を將軍に任命して軍隊を指揮させていた。藤原一族が天下を握り要職を占めると、誰も戦場に行くのは嫌だから下請けに出すか、民営化を考えるようになる。

頼山陽は「日本外史」で「藤原氏外戚を以て、世々政權を執るに及びて、卿相の位、其の族人に非ざれば擬せず。官、品流を論ずること、因習して俗と成る。庶僚百揆、概其の職を世々にす。而して將帥の任は、常に源平二家に委ぬ。是に於いて始めて部門の称あり」と述べた。

藤原氏全盛時代に「軍事の下請け業者」として第一号に指定されたのが清和源氏宗家に嫡男として生まれた文殊丸こと源頼光なのである。彼は早くから堂々と藤原一族の有力者に賄賂を贈り、ゴマを播り、接近して仕事を貰った。

それだけでは単なる汚職業者に思われてしまうが、源頼光は知恵も優れ胆力も据わった弓の名人で、何よりも重臣に恵まれていた。渡邊綱、ト部季武、碓井貞光、坂田金時は「四天王」として後世に伝説的な名を残した勇士であった。

第一の臣・渡邊綱は、嵯峨天皇の第十八皇子で次の天皇にも擬され左大臣を務めた源融（みなもととおる）の五代目であり、祖父及び父は武蔵守を務めた。生まれた直後に父母同時に失ったので、仁明天皇系の公家に嫁いでいた伯母に育てられたという。その縁で源満仲に預けられてから頼光に従っていた。

歌舞伎には「戻橋」という出し物があるとか、渡邊綱は主人・頼光の言いつけで日が暮れてから

一条大宮まで出かけた帰りに、戻橋のたもとで愛宕山の鬼が化けた美女に出会った。頼まれて夜道を同行するうちに鬼は正体を現して背後から首筋を掴んで吊り上げた。渡邊綱は慌てずに主人から借りていた名刀「髭切丸」で鬼の腕を斬った。片腕では不自由な鬼は、渡邊綱を育てた伯母に化けて落し物を取り返しにきた。

ト部季武（うらべすえたけ）は父祖の代から源氏の家臣であったが、些細なことから父親と喧嘩して家出してしまった。天録三年（972）夏、主の源頼光は検非違使判官（警察幹部）としての勤務ぶりが認められて上総介に任命された。

上総国は常陸国と同じく親王任国であり頼光が事実上の長官になるから破格の出世である。赴任の前にト部季武の老父が頼光の領地・攝津国から出て来て渡邊綱に「家出中の息子を探して欲しい」と頼んだ。その頃、「季武は関東に居るらしい」という噂があった。今回も自分が高齢で主君に同行出来ないために家出を許し息子に家督を譲る決心をしたのである。渡邊綱は頼みを快諾し、頼光に従って関東へやってきた。

ト部季武も箱根山中の寺で僧兵の真似事などしていたが、京の都や主君のことや家のことなど忘れた訳ではない。上総国司として赴任する源頼光の一行が伊豆国府（三島市）に逗留しているという話を聞いて、たまたまにやってきた。

国府の門前でうろついているところを番兵に見つかって騒ぎになり、出てきた渡邊綱がすぐに頼光の前に連れて行った。老父のことを聞いた頼光は、季武を一旦は摂津国（大阪府）に返した。父子の対面が叶った父親は程なく息を引き取り、野辺の送りを済ませたト部季武は上総国へ行き改め

て頼光に忠誠を誓ったのである。

碓井貞光の先祖は橘氏系の武人らしいのだが父祖の代に事件に連座して信濃国へ流され碓井峠に隠棲していた。両親が諏訪明神を信仰して授かったのが貞光で、母親は早世し父親も七歳のときに失った。遺言で「武芸を磨き、名の有る主人に仕えよ」と言われたので、幼い頃から独学で武術を習い、心身を鍛え十四歳で立派な戦士になっていた。山中の動物を相手にしていたのだが、一人で生きねばならないから、鳥でも獣でも「昨日の友は今日の食料」になった。

「名の有る主人」を探して諏訪明神に願をかけて夢で源頼光のことを知って上総国へ訪ねてきたのである。渡邊綱とト部季武が面接して若年ながら不敵な面魂に驚き、すぐ主君に報告して会って貰った。頼光が祖先の名を問うと、父親から聞いたことを述べ、「知らない祖先の名よりも、自分が育った場所に相応しい名前です。碓井荒太郎貞道と申す」と答えた。

とかく人間は競馬の種馬に習ってイエガラを自慢したが、この荒太郎の自主独立・自信に満ちた答えに感心した頼光は、自分の名の一字を授け「碓井荒太郎貞光」と名乗らせて馬・鎧兜・太刀などを与え家臣に加えた。

坂田金時は「足柄山の金太郎」である。童謡の世界では早くから知られていたのだが、棲家が天下の峻険・箱根の裏街道から北に見える1200mの高山「金時山」の山奥である。碓井貞光と同じように誰にも会うことが無く動物を相手に暮らしていたけれども、金太郎は無闇に動物を食わず友達にしていた。父親が太陽で母親は山姥（やまうば）山中に棲む女性の怪物）だと言うが嘘であ

ろう。父親が日焼けした獵師で母親は文字どおり山の小母さんだと思ふ。

天延四年（976）春、源頼光は上総介（かずさのすけ）として千葉県市原市にあった国府に詰めていた。八月には任期が切れる。ところが頼光主従は急遽、任期を繰り上げて都へ向かった。その理由は不明だが当時は、先に述べた「安和の変」の後の政情不安に加えて、北家・藤原氏の兼通、兼家兄弟が権力を競っており争いの起る要素が充分にあった。それを案じた有力者が源頼光を呼び寄せたと推定される。

東京湾フェリーで相模国へ来た頼光主従は箱根路を進んで金時山が見える峠にさしかかった。春の日に光る金時山が不思議な雰囲気を持って聳えている。地元では熊や猪と仲良しの怪力少年・金太郎の話が知られていた。

金時山を見上げた頼光と、随っていた渡邊綱や卜部季武らは同じ思いであった。これから何かを待っている都へ戻るには一人でも多くの強い家来が必要である。主従は脇道へ逸れて金時山中へ向かい、自然児・足柄金太郎を坂田金時として家来に加えたのである。

源頼光の四天王には、渡邊綱の「一条戻橋」に代表されるような妖怪退治や武勇伝がある。

妖怪も、他にも武士は大勢いたのに強い奴を選んで勝負する訳が無いから、それらの話はオマケである。名門の武将たちが、現在の相撲部屋と同じ様に「金の卵」を地方に求めて強力な武士団を形成してゆく様子が窺える。

四天王以下の家臣を引き連れた源頼光が上総国から都へ戻って間も無く起こったのが「鬼の腕事件」である。一旦は奪った腕は騙し取られたが、

鬼も怪我の治療で病院通いがあるから悪さは出来ない。都の人たちは安心した。

ところが五月十一日の夜中に内裏から火災が発生して京都の大火事があり、六月三日から一週間ぐらいは大地震が続いた。源頼光は其の度に宮中へ駆けつけて警護に当たった。気の毒なのは未だ成人式も済んでいない円融天皇で、天変地異の責任を感じて「退位する」と言い出した。取り巻き連中が慌てて天皇を宥め気休めに年号を「貞元（じょうげん）」と変えて誤魔化した。

円融天皇と藤原兼家の娘との間に生まれたのが一条天皇である。この時代に紫式部や清少納言、伊勢の大輔など才媛が世に出るのだが未だ先のこと、間に乱心の噂があった花山天皇を置いて取り敢えず一条天皇は六歳で即位した。

一条天皇の治世四年目の永祚（えいそ）元年頃に京の都では行方不明になる者が多かった。

都に近い丹波国府（亀岡市）からも近辺諸国で失踪する者がいるとの報告が入っていた。丹波国府の調べでは国内の大江山に怪しい者どもが巣くって砦を築き威勢を誇示していたが、いつの間にか主力が丹後半島の千丈が嶽という険しい岩窟に移ったと言う。行方不明の人たちは丹後半島に分散して監禁されているらしい。

国府の役人が恐さ半分で調べた結果では賊どもは神変自在で険しい山中を飛ぶが如くに移動しており人間では無いとされていた。首領の名は「酒呑童子」と言い、幹部には「茨木童子」と言う大男もいる。其の頃、源頼光は鎮守府將軍として蝦夷に派遣される予定だったから敢えて大江山の賊のことは知らぬふりをしていた。

大江山の怪物の噂が広まるにつれて、朝廷では

これを退治する武将を探したのだが、相手が鬼だとなると、入札でも随意契約でも引き受けてくれる武将がいらない。そうなると頼りになるのは一流企業の源頼光しかない。直ちに鎮守府將軍（蝦夷行き）の内定が取り消されて源頼光と部下の四天王らが軍勢を率いて丹波国に派遣されることとなった。

与力として付けられたのが藤原保昌という兵衛府の武士である。頼光の遠縁に当たる者だが少し事情があった。実弟の保輔は「袴垂（はかまだれ）」と名乗る大盗賊だったのである。保昌は弟を討つ立場ながら躊躇して苦しんでいたから、その罪滅ぼしに頼光の酒呑童子征伐には全面的に協力するつもりでいた。後に袴垂保輔は碓井貞光に捕まり、一度は脱獄したのだが四天王に討たれた。時代の反逆者だったのである。

正暦元年（990）三月二十二日、源頼光を総大将とする征伐軍が丹波国に向かって出発した。近隣諸国には朝廷から援軍を差し出すように命令が下っていたのだが、相手が鬼だと思ひ込んでいるから、援軍は一人も来ない。源頼光の主従クラス藤原保昌主従だけである。それでも都合、千二百騎が山道を進んだ。

平野部を過ぎて山地にかかる頃、総大将の頼光が顔面蒼白となり、眼も虚ろとなって前進できなくなった。家臣たちが驚き、軍を止めて旅宿を探し床に休ませた。頼光は深い眠りに誘われ、夢の中で八幡大菩薩の啓示を聞いた。

夢に現れた菩薩が言うには「山中にこもる強敵を討つのに軍勢を差し向けても不利である。少数の人員で敵の懐に入り、計略をもって倒すしかない。案内は住吉明神のご加護がある」と

のことであり、頼光はそこで意識を回復した。主だった者を集めた頼光は、夢の話の概略のみを語り自分で山中に入る決心を述べた。

渡邊綱が基本的には賛成して、大江山は主力の軍勢が囲み、少数の人員で千丈が嶽に潜入する案を出した。直ちに藤原保昌が賛成した。

元気を回復した源頼光は、長男の下野大掾（しもつけのだいじょう）頼国に大江山総攻撃の指揮官を命じた。遅れ馳せながら丹波国の国府からも四百の兵が来たので千丈の軍勢が大江山を取り囲んだ。その間に頼光と四天王と藤原保昌は山伏姿に変装して奥地の千丈が嶽を目指し山道を行くことになった。三十人ほどの兵が心配して付いて来たのだが、多人数では敵に疑われるので論して本隊へ戻させた。

一行は伯耆（ほうき）の国の大山へ修行に行くという想定で大荷物をも自分で背負い、年長者の保昌を先達（リーダー）として行動することを確かめた。この保昌は、小野小町と同様に謎と伝説に包まれた天才女流歌人・和泉式部の夫だった人物で、学問にも通じていたので、身分関係を越えた理想的な人選である。

荷物の中身は山伏の必需品と、多くは酒と珍しい食べ物を入れた。それらは酒好きな酒呑童子を油断させる「武器」になる。六人の偽山伏は三月二十四日に丹後山中の小さな神社に泊して千丈が嶽を目指したのだが道を知らない。

聞こうにも山道は誰も通らない。歩みが遅くなった。すると怪しげな男が何処から来たのか一行を追い抜いて去った。「これぞ夢のお告げ」呼び止めて道を聞こうとしたが「急用がある」と言っ行ってこうとする。六人が口々に同行を嘆願した。男

は仕方なく「遅れず文句を言わずについて来るなら」という条件で承諾した。

頼光主従は山伏に成りきって「我等も山中の修行はいとわぬが居場所が分からぬのでは伯耆の国に辿りつく見当もつかぬ。ここはどの辺りであろうか」と問えば、男は「千丈が嶽へゆく道」と答えた。頼光が「貴殿はなぜ、そのように山道を急がれるのか？もし内密のことであっても我等は修行中の身なればめつたに口外は致さぬ」というと、暫くは黙っていたが「山伏殿ならば世俗には疎かるう：お話申すが、決して他言なさるな！」と念を押して話した。

男は酒呑童子の子分で大江山が囲まれたことを報告に千丈が嶽へ行く使いだだったのである。一行は心中に喜び「千丈が嶽に居られるお頭殿は神通力をお持ちの鬼神におわすか？」と恐れたふりで聞けば、男は「何の何の：、体格勝り力あり、武芸に優れたお方だが、鬼にあらず、誕生の頃から異形なるゆえ、親にもいとまれて山野に育ち、多くの術を会得した御仁なれば敵う者はおらぬが、狐狸妖怪の類にはあらず：」とおかしそうに大笑いをした。

やがて日が西に傾く頃に一同は山道が二筋に分かれる小さな峰に着いた。男は左の谷を指して言った。「この谷を下りて川上を辿れば伯耆の国に行く街道に出る筈。ご一行はそちらを行かれよ。ここで別れ申す」

先達役の藤原保昌が残念そうに「貴殿のお頭にはお目にかかれぬものか：我等も修行のために怪力の技を拝見したいと思っただのだが：」と頼んだ。男は大げさに首を横に振り「無理を言われるな、此処から先はお頭の領域で、やたらに立ち入るこ

とは出来ぬ。之までも山中に入って無事に戻れた者はおらぬ」と言う。

ここから進めなければ目的は達せられない。藤原保昌は残念そうに一同が背負った笈（おい）を見回し「実は我等は修行中の身なれど酒が好きで、この笈の中には美味しい酒が沢山に入っておる。お頭にはご挨拶代わりにこの酒を献じようと思っただが：それでは致し方ござらぬ。

ここで別れ申す」と、頭を下げて歩きだした。男は一瞬、困った顔をして「お待ちください、お頭は何よりも酒が好物なのだが：拙者は身分低き使いの者ゆえ、判断は出来ぬが貴殿らのことを取り次いでみよう。暫く此処で待たれよ」と言っ

て断崖に沿った岩の道を登っていった。やがて使いの男と数人の山賊が現れ、頼光たちを取り囲んで十分ほど険しい道を登り千丈が嶽の奥に有る岩屋に連れ込んだ。途中には人か獣か分からない骨が各所に散らばって薄気味が悪い。入口には山賊たちが険しい眼で睨んでいたが、頭目の酒呑童子は使いの男から聞いた「多量の酒」にご満悦のようで、機嫌よく山伏の一行こと源頼光たちを迎えた。

先達の藤原保昌が丁重に挨拶を述べ山伏の身分を明かすように経文を出して見せたが、酒呑童子は酒にしか興味がない。山道を長い時間運ばれてきた酒は甕の蓋を開けるまでもなく岩屋の中に芳醇な香りを漂わせる。

頼光たちは、それぞれに背負った笈の中から酒の壺を取り出して並べた。酒呑童子の子分で疑い深いのが「山伏の分際で、これほどの酒を持ち歩くとは不審な奴、己らは何者か」と言う。

保昌が困ったような顔で「実は我等が丹後の国

に入ったところ、何やら合戦があるとかで大勢の武士たちが集まり、そのために国中の酒が買占められる：との噂を耳に致しました。恥ずかしながら、我等は修行の身なれど揃って酒好きでござる。行く先々、丹波国で酒が呑めぬとあつては困るゆえ、背負えるだけを持って道中を致した次第、考えてみれば浅墓なことだと思わぬでもござらぬが：」と尤もらしく答える。

「いや、さもあるう。酒好きとは、そう言うものよ、のう山伏どの：」酒呑童子が自分のためには浅墓な助言をしてくれた。それから山賊と征伐軍幹部との合同宴会が盛大に開かれて、一同が酩酊してしまつた。

伝説では頼光たちが持参した酒は「神変鬼毒酒（しんぺんきどくしゅ）」と言う、鬼にだけ毒になる酒とされているが、そのような都合の良い酒があるとは思われず山賊たちは山伏に勧められるままに飲んで眠くなつただけであろう。目的がある頼光たちは当然、呑むふりだつた。

酒呑童子が寝込んだのを見届けた頼光が起き上がったとみると、酒の量の多さを怪しんだ手下が酔わずに監視を続けていた。山賊には惜しいほどの勤務ぶりである。その手下に頼光はふらふらと近寄り「申し訳ござらぬが水を一杯所望したいのだが：」と、よろめきながら言った。

手下が水甕に向いたとき走り寄つた坂田金時が素手で手下の首を絞め、その男の太刀を頼光に渡した。頼光は岩屋の奥室に入って酒呑童子の上に馬乗りの姿勢で心臓部を一突きにし四天王と保昌は順序良く寝ていた賊を退治した。

「前太平記」によれば、この時に千丈が嶽で「鬼」として誅殺されたのは幹部八名、中堅クラスの鬼

二十二名の合計三十四である。源頼光らの偽山伏を案内してくれた兵士クラスの者は異変を聞いて逃亡したようで、頼光はお礼をしようと「お人好し」の賊を探したが居なかつた。

此処の人質は既に殺害されたようで見つからず一行は険しい山を下りた。途中までくると多くの家臣が三々五々と心配して様子を見にきていた。頼光が大江山攻撃軍のことを聞くと山城は困んだが攻めあぐねているとのことだつた。

頼光は迎への者に命じて千丈が嶽で退治した鬼の首を幾つか取り寄せ、それを翳して攻めるように指示した。酒呑童子が退治されたことを知つた賊兵たちは戦意を失い、大江山は簡単に陥落させることができず人質を救出した。

源頼光、卜部季武、碓井貞光、坂田金時、藤原保昌は都に向かい朝廷に「大江山の酒呑童子及びその一味賊徒を征伐した」ことを報告した。丹後の国司・藤原経教には渡邊綱が使者として知らせに向かい、国司は綱の案内で軍勢五百を率いて千丈が嶽に向き、その成果を確認した。

作戦は大成功であつた―筈なのだが、千丈が嶽から逃れた、と言うよりも、その日、千丈が嶽から離れていた大物で「茨木童子」と名乗るナンバ―2の山賊がいた。源頼光らが大江山を攻めるといふ噂があつたので、大胆にも京の都に潜入して情報収集に當つていた。討伐軍の丹後入りで大江山が心配になり、周辺でウロウロしている間に城にも入れず、酒呑童子の許に戻るのも遅くなつて

補聴器専門店

いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談下さい。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。

また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

(石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡 2 1 5 8 6
電話 0 2 9 9 - 2 4 - 3 8 8 1

取り残されたのである。

「茨木」の名のとおり大阪北部の出身者であるが近畿地方は盗賊残党の詮議が厳しいため東国に逃れて、各地で凶悪な単独犯行を繰り返して京の都よりも人口が多いという常陸の国の国府にやってきた。此処には「茨城(木)」という懐かしい名前の土地があり、町の西に山の形や雰囲気が大江山に似ている山があった。

さほど高くないが全山が鬱蒼とした樹木に覆われていて谷も断崖もあり、滾々と水が湧き出ている。然もこの山には「龍神が棲む」という伝説があつて、麓に賑やかな集落があるのにあまり人々が登つてくることが無い。正に隠れるには最適な場所であつた。

茨木童子は地元で馴染むために「茨城童子」と改名届を出し、龍神山を棲家として近隣の農家から目立たないように食べ物などを盗んで暮らしていたが、そのうちに山麓の峠道は街道らしく時折、商人らしい者が行き来することに気付いた。そして自分が逃亡者であることを忘れ、旅人から金品を奪うことを思いついた。

茨城童子は大江山の経験を参考に旅人を驚かすには自分が鬼に化けることだと考えて、木の枝や藤蔓などを利用して大きな人形を拵えることにした。人形の目玉には、勿体無くも山麓の村上神社から御神体の鏡を盗み出してきた。

秋も深まった或る日の夕暮れに染谷の集落に住む職人が裏筑波の親戚を訪ね、沢山の野菜を買って帰ってきた。明るいうちに龍神山麓の峠を越える予定であつたが、荷が重く少し時間が遅れた。辺りは昼でも薄暗い場所である。茨城童子は重そうな荷を絹織物だと判断した。

苦勞して作った大人形を峠の頂上付近の立木に

下向きに立てかけ、自分は草むらに潜んで獲物にくるのを待った。丁度、細めの月が雲間から少し覗いて鏡に反射し、上がってくる職人の目に妖しく映った。思わず見上げると巨大な影が目の前にある。「俺は大江山から来た茨城童子だ。命が惜しければ荷物も着物も置いて行け！」

職人は肝を潰し夢中で野菜を放り出し、着物を脱ぐと来た道を転げるようにして龍神山を離れた。家には帰れないので、下帯一本の姿で麓の村に助けを求めた。

「龍神山に大きな鬼が棲む」職人の証言で噂は付近の村々に広まった。ただ、奪われた品物が野菜だということで「鬼は野菜を食べるのか？」

という疑問が生じたが、鬼は何でも食らうのであると一同が納得した。そう言えば山麓の家々で、いろいろな物が無くなっている。

調べてみると村上神社のご神体も無くなっていることが分かった。龍神のご神体だから龍の魂である。龍と鬼が合体したら大変なことになるであろう。山麓の村人たちは愕然とした。

茨城童子の方でも絹織物だと思つて奪った包みが野菜だったことに危機感を募らせていた。普通のものゝ奪ったのでは「只の人」の仕業だと分かつてしまい、鬼の仕業だと思わせる計画が無駄になる。鬼らしい犯罪を証明しなければならぬ。

龍神山麓を通る旅人の何人かが金品を奪われ、被害される事件が続いて起こつた。

麓の村々でも被害が開始された。ある家の夫婦は米を盗まれる現場を見つけて盗賊を捕り押さえようとして斬られた。村々の代表が相談して国府を訪れ役人に訴えたのだが、いつの時代でもお役所

仕事は手続きが面倒である。

「相手が鬼では管轄が違ふ」「でかい凶体の犯人では収容する牢屋が無い」「大江山の残党だというのは、丹波国庁に連絡してからでないかと捕えられない」などなど無責任な屁理屈を並べて腰を上げようとはしない。

腹を立てた村人たちは自分達で何とかしようと思ふようになり、若者を中心に鬼退治を実行することになった。何よりも村上神社のご神体を奪い返さねば何が起こるか不安である。相手が鬼だというが、米や野菜を盗むのは単に大男の盗賊であろうという古老の意見で鎌や竹槍や斧を武器にして退治することになった。

慎重に計画を練り、いざ実行という時に龍神山の頂上が俄かに黒雲に覆われて雷鳴が轟き渡り土砂降りの雨が降り出した。「これは龍神様のお告げかも知れん」鬼退治でも龍神山を血で汚してはいけないと言ふことであろうか……

一方では既に龍神が鬼に騙されてしまったのではないかと疑問も生じて、結局、村人の鬼退治は中止になった。村々の代表は改めて国府に鬼退治を請願した。国府側でも「役人が何もしてくれない」という苦情が都に聞こえては出世に響く。そこで気が付いたのは酒呑童子を倒した源頼光様一行を派遣して貰うという案である。村人にはそのように伝えておいた。

「あの有名な源頼光が四天王を率いて龍神山へやって来る」聞き耳を立てて村人の動向を探つていた茨城童子は慌てた。千丈が嶽では酒呑童子以下、屈強の者三十人以上が源頼光ら六人に全滅させられている。大江山にも千六百の軍勢が攻めてきた。旅費の都合もあるだろうから大勢は来ない

にしても一人では敵わない。

茨城童子は闇夜に紛れて龍神山から逃亡することにした。行く当ても無いが、取り敢えず西の方角に逃げて筑波山麓に隠れよう。山から街道に出て麓の村を抜けるときに、盗賊本来の習性が出て手ぶらで逃げるのが物足りなくなり、一軒の家から牛を盗んでいった。

牛の鳴き声に目覚めた村人が寝ぼけ眼で闇の中を見据えると牛を引いた大男の輪郭が見えたのだが、恐ろしさに追うことが出来なかった。「茨城童子が牛を盗んで逃げた」情報は国府に知らされた。役人は自分たちのことは棚に上げて「逃げ出すのは弱気の証拠！」とばかりに早速、軍勢を繰り出して追跡した。

茨城童子は牛が一緒なので早く逃げる訳にはいかない。東の空が明るくなる頃にやっと筑波山麓に辿り着いた。国府の軍勢が素早く行動したことなど思いもよらず道端に座り、牛を売って金に換えるつもりで日の出を待っていた。

東の方から迫っていった国府の役人は朝霧の中に倒れている牛を発見した。追っ手に気付いた茨城童子が隠れる場所を失い咄嗟の苦し紛れで牛を殺し、腹を割いてその中に隠れたのだ。牛の死体だけで茨城童子の姿が見えない。

「近くに居る筈だ。探せ！」相手の正体が分からないので用心しながら追っ手の軍勢は周辺を探して回ったが茨城童子の姿は無い。その時、倒れている牛の腹が異常に大きいことに気付いた役人がいた。「怪しい！」役人は咄嗟に太刀を抜くと倒れている牛の腹に力一杯刺し通した。

「ギャー！」凄まじい悲鳴が地面の下から響き渡り、さしもの茨城童子こと大江山残党の茨木童

子は故郷も遙かな常陸国で「牛の死骸」として無様な生涯を終えたのである。

龍神山麓を探した村人たちにより、村上神社のご神体も取り返すことが出来て無事に神社に安置された。茨木童子が苦勞して拵えた大きな鬼の模型は、分解されて村人の薪になり、龍神山は再び静かな聖なる山に立ち返った。

勿論、源頼光や四天王が龍神山に来ることは無かった。それどころか、常陸国府の役人たちは「源頼光以下の派遣申請状」を朝廷に出すのに、自分たちの面子に拘ってどう書いて良いのか分からず、未だに手続きはしていなかった。このことは絶対に秘密にされていた。

村人たちが鬼退治を決めた時に予定どおり計画が実行されたとしても相手が大江山生き残りの凶悪な茨木童子では成功したかどうか疑問も残る。それを考えると、事件を解決してくれたのは国府役人ではなく、お山の神様だったことになる。龍神は常陸国府・石岡の守り神として鎮座しており、その役割の通りに凶賊・茨城童子から村人を守るガードマンの役目を果たしてくれたのである。人々はそれを知らない。

Coffee & Tea Room

〈ふらの〉

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・

蕎麦会席料理のお店です

(ギター文化館通り)

看板娘(犬)の「うらら」ちゃんが皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30~15:00

16:00~18:00

月・木曜日が定休日です。

電話 0299 43 688

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を自分の手で紡ぎ出してみませんか。あなたの庭の土で...、大好きな雑木林に一摘みの土を分けていただき、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465

0299-55-4411

編集事務局

T 315-0001

石岡市石岡13979-2
TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)